

教会暦と聖書の流れ

耳が聞こえず口のきけない人をいやした先週の箇所(マルコ 7・31-37)からは少し飛んでいます。きょうの箇所は、いわゆる「ペトロの信仰告白」と「最初の受難予告」の場面です。ガリラヤでのイエスの力強い活動を伝えるマルコ福音書の前半(1・1～8・30)と十字架と復活への道を歩む後半(8・31～16・8)のターニングポイントとも言える重要な箇所です。

福音のヒント

(1) この出来事の起こった場所は「フィリポ・カイサリア地方」です。「カイサリア」は「ローマ皇帝(カエサル)」から取られた名ですが、地中海沿岸にある町「カイサリア」と区別するために「フィリポ・カイサリア」と呼ばれました(フィリポはヘロデ大王の息子の名)。ガリラヤ湖に北から注ぎ込むダン川の源流にあたる異邦人の地であり、異教の神パンの神殿がありました。この出来事が異邦人の土地で起こったことに特別な意味があるのでしょうか。イエスは一時的に活動の地であるガリラヤを離れて、これから先の道を確認しようとしていたのではないか、という見方もあります。あるいは、ローマ世界の真っ只中でイエスへの信仰を生き、そして迫害を受けていたマルコの教会にとっては、この状況に親しみが感じられたという考え方もあります。



(2) 「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」というイエスの問いかけに答えて、当時の人々のイエスについてのうわさが紹介されています。このよううわさは、6・14-15にも伝えられていました。「洗礼者ヨハネ」は6章でヘロデ・アンティパスによって殺されています。「エリヤ」は北イスラエルの有名な預言者で、紀元前9世紀の人です。列王記下2章で、生涯の終わりに生きたまま天に上げられたと伝えられています。そこでエリヤは決定的な神の介入のときに、再び天から遣わされると信じられるようになりました(マラキ3・23-24参照)。もちろん、マルコにとってこのよううわさはイエスを正しく理解しているとは言えないものです。

イエスは次に弟子たちに向かって、「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」と問いかけます。ずっとイエスと共に歩み、イエスのなさることを見てきた弟子たち自身の判断を迫るのです。その時、「あの人はこう言っています」とか「この人にこう教えられました」ではなく、自分の判断として、自分とイエスのかかわりの中で、自分にとってイエスという方はどういう方なのかを答えなければならないのです。これは、わたしたち一人一人への問いかけだとも言えるでしょう。

(3) 「あなたはメシアです」の「メシア」はギリシア語原文では「キリストスchristos(=キリスト)」です。「メシア」はアラム語ですが、どちらも「油注がれた者」を意味する言葉です。本来はイスラエルの王が即位するときに油を注がれました(祭司や預言者の場合もあります)。油を注ぐことは神からの特別な使命が与えられ、その使命を果たすための力(神の霊)が与えられることのシンボルでした。「油注がれた者」は、神から遣わされる決定的な「救い主」を意味するようになっていきました。新共同訳の新約聖書は「キリストス」という言葉が救い主の称号として使われている箇所は「メシア」、イエスの固有名詞のように使われている箇所は「キリスト」と訳し分けています。

ペトロはイエスのこれまでの活動を見てきて、イエスをキリスト(救い主)であると宣言しました。もちろん、これは正解です。しかし、イエスはここでそのことを口止めしています。それは、ペトロの思い描いていたキリストの姿が「栄光に満ち、この世で勝利を収める王」であり、受難のイエスの後に従う姿勢が欠けていたからでしょう。

(4) 31節は「受難予告」と呼ばれるものの最初のもので、「必ず…なっている」はギリシア語では「デイdei」という非人称動詞が使われていて、「…ねばならない」とも訳されます。単なる必然を表すというよりも、神が定めたことを表す表現です。

この受難予告を特別な未来予知能力によるものと考えする必要はないでしょう。イエスの活動は多くの人々に信頼と希望を取り戻させましたが、一方ではユダヤの指導者層からの反発と敵意も高まっていたからです。また、神は従う者を決して死の中に見捨てない、という復活への確信と希望をイエスの時代の人々が持つことも自然でした。なお「三日」は正確な日付を表すのではなく、「短い期間」を表す一つの表現だと考えることができます。

31節の「人の子」という言葉は本来、人間一般を指す言葉でしたが、ダニエル7・13-14「夜の幻をなお見ていると、ノ見よ、『人の子』のような者が天の雲に乗りノ『日の老いたる者』の前に来て、そのもとに進み 権威、威光、王権を受けた」という箇所のため、特別な意味を持つようになりました。それは最終的に神から遣わされる栄光に満ちた審判者・救済者という意味です。もちろん、旧約聖書には「受難の人の子」という考えはありませんが、マルコはイエスの受難と「人の子」を結び付けます。そこには人間としてすべての人と連帯しているイエスの姿、人間としての苦しみをとことん味わわれた(だからこそすべての人の救いとなる)イエスの姿を見ることもできるのではないのでしょうか。

(5) ペトロは、自分の考えるキリスト像に合わないことを言うイエスをたしなめます。もちろんイエスの無事を願ってのことでもあります。それに対するイエスの言葉、「サタン、引き下がれ」は厳しい言葉です。サタンは人間を神から引き離す力のシンボルと考えればよいでしょう。神に従う道としての受難の道からイエスを引き離そうとすることはサタンの働きなのです。続いて、イエスのご自分の十字架への道に弟子たちを招きます。十字架刑に処せられる人は処刑場まで自分の十字架を担いで行きました。「十字架を背負う」は死そのものというよりも、死に至る苦しみと辱めを意味しているようです。わたしたちにとって「自分の十字架を背負ってイエスに従う」とはどういうことでしょうか？

なお、「命を救う」「命を失う」というときの「命」は、この世の命と永遠の命の両方の意味で用いられています。